

新しいことを知るとか言って。いつでも外国の家に居て、帰る時期は自分で決めたらいいのやから、それは楽。ところが、いざ自分の家に人が来るとしたらなかなか帰れとは言えないから、まず入れんとことなる。」

難民に対して、ドイツのメルケル首相は4万2,000人の受け入れを表明し、『『遠い国のシリアなんて自分には関係ない』とは言えないはずだ』『保護すべき人は保護するのが欧州の伝統』という持論を強調した。難民問題には「人権」が欧州全体の理念にかかわるテーマだという認識があったという。

「あれこそがリーダーシップ。言っていることが間違っているとは、誰も言えない。もしそれを否定したら、自分の生活のなかのいろんなことを否定しなければならない。渋々でも受け入れるという余裕。ドイツ国内にももちろん反対は結構あるけど、それでもあえて人間はこうあるべきだと、人が困ったときはこうすべきだとはっきり言う。その言葉に惚れ惚れする。それはすべて『世界人権宣言』に書いてある。」

繰り返し伝える

「世界人権宣言」は1948年12月10日、第3回国連総会で採択された。宣言は第一条「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに

同胞の精神をもって行動しなければならない。」から始まる。

「よく『理想はそうでも、現実が違う』と言う。でもすごい現実があつて、それを克服したなかから『宣言』ができたわけでしょ。世界全体がこれを認めている、いわば水戸黄門の印籠みたいなもの。尺度、基準ができているから、その基準を満たしていないところは、直せと言える。」

「世界人権宣言」に基づいて活動しているのが、人権擁護団体アムネスティ・インターナショナルだ。1961年創立され、世界80カ国に支部があり、死刑の廃止、人権擁護、難民救済などの支援活動を行っている。これまで世界各地の「良心の囚人」と呼ばれる人々を数多く救出し、1977年にノーベル平和賞を受賞した。

いま、若い人たちは、日本は民主主義国家だから人権は守られ、それを空気のように感じているのではないか。言論の自由もある。しかし、万が一、軍国主義が復活したら、その自由は失われるかもしれない。人権を守るために、私たちは何をすべきなのだろうか。

「人権宣言について学校でもいろいろ教えるんだけど、子どもたちのなかにどれだけ残るのか。教室で一方向的に教えるだけじゃなくて、自分の生活とつなげて考える。結局、あんたの生活のこういう場面がこういう意味やでというふうには言わないと、しっかり身についていけない。難しいことだけど、それを繰り返し、繰り返しやらなあかん。しつこく、飽きないで。」

ハンソンさんは、いまインターネットの「夜の世界地図」が興味深いそう。

「安定してお金のあるところは、めちゃくちゃ明るい。朝鮮半島は、南は明るいのに北はほとんど真っ暗。シリアも以前ダマスカスが平和なときはいい暮らしがあっただろうし、灯もついていた。けど年々暗くなってきている。それだけ生活が苦しくなっているということ。誰だって逃げ出すわけよね。日本は明るすぎる。だから星が見えない。」

快適な生活を送るために世界中から食物や水、資源を取り込み、恩恵を受けるばかりの日本。ハンソンさんは「なんでも取った分は返さないといけない。作っている国のいい状態をもっと考えないといけない」と強く語った。



小さな女の子を抱くシリア難民の女性 ©UNICEF_NYHQ2015-2378_Romenzi